報告 若手天文教育普及 WG（わか天）の活動 VII
～テーマセッション「世代を超えて盛り上がろう！」～

松坂 怜（東京大学）、若手天文教育普及 WG

1. はじめに

第 39 回天文教育研究会・2025 年日本天文教育普及研究会年会（慶應義塾大学日吉キャンパス）では、「枠を超えて盛り上がろう！天文・宇宙」をテーマに掲げ、多様な立場や世代をつなぐ活動について、広く開かれた議論が展開された[1]。その中で、若手天文教育普及 WG（通称：わか天）[2] が企画・運営を担当したテーマセッション 2「世代を超えて盛り上がろう！」は、30 歳未満の若手による発表を通じて、天文教育・普及のあり方を未来志向で考える貴重な機会となった。

このセッションでは、「天文教育・普及の担い手として、いま、若手の私たち“も”積極的に関わっていきたい。世代を超えて、ベテランと若手が共にこれからを作っていきたい。その思いを形にするため、若手世代による天文教育および普及活動の最新の事例と、それに基づく課題や展望について共有し、議論する場とします。」[1]という趣旨のもと、多様な実践とその背景が共有された。

また、セッション間の昼食時間には「若手交流会」と題し、昼食を取りながらのカジュアルな交流イベントが実施された。こちらは中学生から 30 歳未満の若手有志によって企画・実行され、進行はわか天が担当した。

本紙では、これらのテーマセッションおよび交流会の様子を紹介しながら、セッション全体の特徴をまとめる。さらにわか天が発表した内容についても簡単に紹介する。

2. テーマセッション 2「世代を超えて盛り上がろう！」の報告

テーマセッション 2 は、具体的に「世代や立場を超えた相互理解を深め、今後の協働のきっかけを生み出すこと」を目的として開催された。若手の活動は、既存の天文教育・普及の枠組みに新たな視点や熱量をもたらす可能性を秘めており、本セッションを通じてその魅力や課題を広く伝えることが期待される。

本章では、年会の参加者やテーマセッション 2 の実施状況について説明し、セッション内で報告された内容を簡単にまとめる。

2.1　全国各地から多くの若手が参加

今年度の年会には、最終的に合計 188 名が参加し、そのうち学生参加者は 55 名で、全体の約 30%を占めた。例年と比較しても非常に多くの参加者が集まった年会となったが、その中でも特に学生を中心とした若手参加者の割合が高かったことは、参加者増加の一因と考えられる（1 は年会で発表をした若手）。

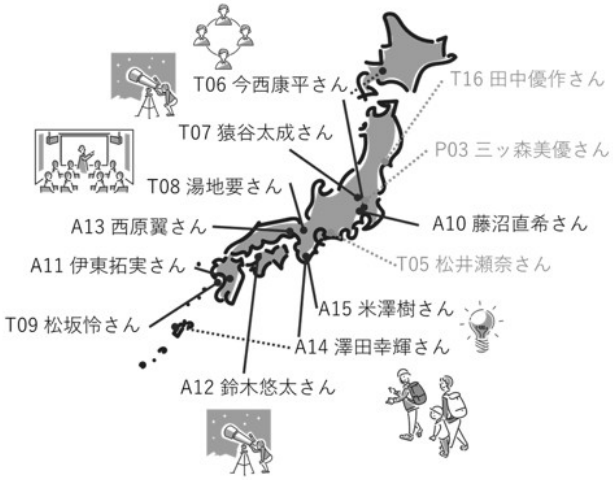

図 1　年会で口頭あるいはポスター発表を行った若手の活動地域。黒文字はテーマセッション 2 で発表した若手（わか天の発表は除く）。

図 2　年会におけるわか天メンバーの発表の様子。2024 年度に活動したメンバー5 名全員が年会に参加した。WG の活動報告に加えて、それぞれの地域や大学での研究・教育活動について発表を行った（図内に年会における発表番号とタイトルを記載している）。

テーマセッション 2「世代を超えて盛り上がろう！」では、30 歳未満（発表当時）の若手による口頭発表を中心に構成した。発表者は、北は北海道から南は九州・沖縄まで、日本各地で活動する（してきた）学生や若手社会人であり、それぞれが所属する学校・地域・団体・教育現場での実践事例を持ち寄って発表を行った（図 1）。

2.2　わか天メンバーによる活動報告

本セッションは、企画を発案したわか天メンバー自身が中心となって運営され、発表も積極的に行われた。座長進行はもちろんのこと、2024 年度の活動メンバー全員が筆頭発表者として登壇し、それぞれの関心や取り組みに基づいた発表を行った（図 2）。

まず、村越と齋藤の発表では、2024 年度にわか天が実施した各種イベントの報告が行われ、年間を通じた活動の広がりが示された。例年継続してきた多数の参加者を集めるオンライン企画[3]に加え、外部資金を獲得して実施した対面企画など、独創的かつ実践的な取り組みが数多く紹介された。

続いて、小林の発表では、これまでのわか天の取り組み（5 年間）を振り返るとともに、今後の活動方針について提案がなされた。特に、「全国の若手とベテランをつなぐプラットフォームとしての役割強化」や、「まだ教育・普及活動の経験がない若手が中心となって企画・運営する星空観望会のサポート」といった今後の展望は、聴衆の強い関心を集めた。

さらに、わか天メンバーである西原と松坂からは、それぞれの所属大学や地域コミュニティにおける研究および教育普及活動の事例が紹介された。西原は、重力レンズ効果を再現する教具について、その作製方法や工夫を解説し、今後の活用方法について聴講者と議論した。一方、松坂は、地方での観望会の実

施を含む教育普及活動や、天文をきっかけとした地域連携の取り組みを紹介し、若手とベテランが協力しながら教育普及の現場を築いていくことの重要性を示した。これらの発表内容は、今後、年会の集録[4]として公開される予定であり、ぜひ注目してほしい。

2.3　若手の活動の多様性と展望

テーマセッション 2 では、研究成果の紹介にとどまらず、教育普及や地域連携に重点を置いた実践的な発表が数多く行われた。特に目を引いたのは、若手研究者や学生団体による主体的な取り組みであり、大学や地域の公開天文台と連携した観測実習、児童向けの出前授業、手作り装置を用いた天の川銀河の電波観測等、天文（学）を直接体験できる場を創出する活動が報告された。また、カードゲームや観光動機調査、夜空の明るさの長期モニタリングといった、天文を玩具や観光資源と結びつける試みも見られ、対象層や活動フィールドの幅広さが際立った。さらに、今回は高校生自身が発表者として登壇し、自らの活動や成果を直接共有した点も特筆される。

加えて、セッション全体を通して、世代や地域を超えた交流・協働の重要性が強く打ち出された点も特徴的であった。情報の蓄積や人のつながりを意識したオンラインコミュニティの立ち上げ、全国規模の観測大会（スターキャッチコンテスト）の構想、若手とベテランをつなぐプラットフォームの提案など、持続可能なネットワーク形成や活動基盤の拡充を目指す発表が相次いだ。これらは単発のイベントにとどまらず、長期的な連携体制や知識･経験の共有を視野に入れたものであり、「世代を超えて盛り上がろう！」というセッションテーマの趣旨を明確に体現していた。

3. 若手交流会の実施

本年会では、30 歳未満の参加者を対象とした若手交流会を実施した。交流会は、若手有志の企画により運営され、進行はわか天が担当した。目的は、世代や所属を越えた横のつながりを少しでも広げることであり、気軽に交流できる場として企画されたものである。

当日は 20 名以上の参加者が昼食を取りながら、それぞれの活動内容や興味・関心について紹介し合い、各自が抱える悩みや課題も率直に共有した。学生間での名刺交換や情報交換も活発に行われ、参加者同士が新たなつながりを築く姿が目立った。約 70 分間という限られた時間ながら、終始会話が途切れることのない和やかな雰囲気の中で、意義深い交流が実現したと考えている。

4. おわりに

今回の年会では、若手の参加が多く、これからの教育普及活動のあり方や、天文教育普及研究会（本会）そのものの運営について「若手」の視点から考える非常に良い機会となった。また、議論や交流を通じて、世代を超えた共同の新たな可能性と、その持続的な発展の重要性も垣間見ることができた。こうした貴重な場を実現してくださった飯塚礼子実行委員長をはじめ、年会実行委員の皆様には、WG の立場からも心より深く感謝申し上げる。

文　献

[1] 天文教育研究会（年会）について: https://tenkyo.net/category/annual/
[2] 若手天文教育普及 WG（わか天）について: https://wakaten-wg.studio.site/
[3] 西原翼, 齋藤有菜, ほか (2025). 天文教育 2025 年 7 月号 pp. 122-127.
[4] 集録は、今後 web ページにて公開予定である: https://tenkyo.net/paper/annual/

若手天文教育普及 WG（わか天）